

恩納村の稲作



現在、恩納村内で稲作が行われているのは安富祖区のみです。近年、安富祖では栽培した米を「あふそ米」としてブランド化し、広めようという動きがあります。2023年7月11日には、一度は閉鎖された安富祖の精米所が新しく開所しました。

琉球国時代から戦後しばらくまでは、恩納村の他の地域でも稲作が行われていました。17世紀頃に編さんされ『琉球国高究帳』には、中間村(名嘉真)・あふそ村(安富祖)・せらかち村(瀬良垣)・恩納村(恩納)・ふつき村(富着)・古読谷山村(山田)・前田村(真栄田)・よくと村(与久田)の石高についての記述があり、恩納村各地に水田があったことがわかります。1889(明治22)年に金銭での支払いが原則化されるまで、米は主に税として王府に納めるものでした。

安富祖の記述を見てみると、

あふそ村

一高頭 百九拾七石九斗四升四合三才

内 田方 百六拾四石五斗四升四合五勺九才

畠方 三拾三石三斗九升九合四勺四才

と書かれています。一石は約150kgとされているので、田方164石×150kgで安富祖の水田の石高は約25トンということになります。

稲の品種は県から1885(明治18)年に羽地赤穂・名護赤穂が、1887(明治20)年には羽地黒穂が奨励されました。安富祖区をはじめ恩納村で栽培されていたのもこれらの品種と思われる。

1930(昭和5)年には、恩納村が県外種である台中65号を導入したことで二期作が可能になり、生産量が増加しました。時代は不明ですが、『恩納村誌』には安富祖集落の西側には個人が持つ高倉が9軒ほど立ち並んでいたとあります。

明治大正時代にかけて、稲の植え付けから精米まで、すべての作業が人力で行われていました。1933(昭和8)年に初めて恩納産業組合が精米機を導入し、同じ頃、安富祖区でも名護出身の方による機械での精米が始まりました。戦後も農協への出荷が一般的になる1975(昭和50)年頃まで続きました。

1939(昭和14)年の沖繩日報では、「夏植甘藷を初め甘藷、水稻稲付に至るまで農村部落の共同作業班によって一斉植えつけを督励、既に相當の成績を挙げているが、これら町村部落団体中でも特に恩納村字安富祖の共同作業組合はその成立も古く、最も模範的なものとして各方面から賞讃を浴びている」と報じられており、稲作が盛んだったことがうかがえます。

次に恩納村内の稲作を見ていきます。

【名嘉真】

名嘉真区の稲作は、御天田川下流域で始まったのではないかとわれています。

1853(嘉永6)年、ペリーが琉球を訪れた際に派遣した調査隊の記録にも、米を保存する高倉の記述があります。

1942(昭和17)年の『沖繩日報』では、「(略)今や部落には共同製糖場が出来、



参考写真：謝花(現本部町)での田植え
(琉米歴史研究会)